

戦後、毛沢東（八路軍）と戦う

小野口博 鹿沼市

●19歳で召集される

大正13年、鹿沼市下奈良部町に生まれた。

昭和20年3月22日、赤紙（軍の召集令状のこと。赤い紙が使われた）にて召集され、宇都宮36部隊に北支（中国の北部）要員として入隊した。19歳だった。敗戦の色が濃くなっていたそんな戦況であったから、20歳でなく19歳で急ぎ召集されたわけである。召集を拒否すると「非国民」として罰せられるので、反対などはできなかった。

3月30日には、宇都宮の軍道の砂利道をザックザックと行進し、八分咲きの桜を見上げながら、宇都宮駅に向かった。これが最後の桜かな、と思つたことが記憶にある。

●焦土の都市を見ながら中国へ

宇都宮駅から貨物列車に乗せられて九州の博多まで移動した。東京を通過したとき、3月10日の東京大空襲の直後だったから、一面の焼け野原のひどさには驚いた。その後通過した名古屋も神戸も町が焦土と化していた。ずっと箱の中にあるような貨車の状態だったが、たまに小さな窓からちよつと外を見ると、日本のあちこちが焼け野が原だった。

博多からは船で現在の韓国の釜山（ぶさん）に着き、それからまた表から見えないようにした貨車で、2、3日かかって済南まで行つた。その後満州、奉天から天津、済南、青島（ちんたお）、と4日も5日もかかって移動して行つた。

青島の手前、高密（こうみつ）に降ろされたのは私を含めた田口隊と佐瀬隊が38人。あとの何百人は青島に行つた。私は銃砲隊に入隊した。

すでに日本では食料や日用品などが不足していたため、我々の水筒はアルミ製でなく、みな竹の筒だった。戦地に着いたとき、先輩の兵士たちは我々の竹の水筒を見て嘆いた。そして何年も日本に帰れないでいる古い兵隊が聞きたがるので、日本の都市のあちこちが壊滅的であることを知らせると「日本はもうおしまいだ」と、みながつかりした。

●命がけで戦う

普通は入隊すると3か月が兵隊としての教育期間だが、そんな状況ではなかった。入隊して1か月で討伐（反抗する者を攻め撃つこと）に出された。当時中学の軍事教育で実弾射撃を経験していたため、引つ張り出されて討伐隊に入れられたようだ。約3時間歩いた頃、敵の銃弾が頭上をかすめた。古い兵隊には遠くから来るか、近くから来るか弾の飛ぶ音でわかるらしかった。訓練とは違い、

実際の戦闘では命がけだから無我夢中だ。先輩にならって、伏せれば伏せる、前進すれば同じように前にでる。小さなくぼみに身を寄せたとき、腰につけたお守りを手で確かめた。そのとき、出征するときにバンザイ、バンザイと送られた、その神社が目の前に現れた。追い込まれた精神状況だったのだと思う。

ある討伐の時、足首を銃弾が貫通して怪我をした。くるぶしをやらなかったのが幸いだったが、その頃は、治療薬なんてない。膿んだ傷口のガーゼを入れ替えるのが、辛かった。何が痛いつて：麻酔をかけるなんてことはないから。1か月青島病院、次に天津病院と移動し、その後、掖県（えいけん）で合流して隊に戻った。移動は鉄道で、病院列車というのがあった。

●終戦を迎えたはずだが：中国の内戦に巻き込まれる

昭和20年8月に日本は降伏して終戦を迎えていたが、9月、掖県で塹壕を掘って陣地構築（敵を攻撃したり、敵の攻撃を防いだりするために、兵などを配置した場所づくりをする）をしていた。高蜜まで出てくるのに土匪（土着の匪賊）がいたが、野坂参三が八路軍に連絡を取ってくれて、土匪が地雷から何から、全部片付けてくれ、途中、匪賊にあわずに我々は無事高密に集結することができた。

ところが、我々は共同戦線を張っていた蒋介石とアメリカに降伏したわけだが、武装解除（重機、弾薬、銃砲、兵器弾薬すべてを相手にわたすこと）されずに、師団がまるごと蒋介石の軍に取り込まれた。そうして元々は敵だった蒋介石の軍隊と一緒にあって、翌年まで鉄道警備をしながら戦争をする羽目になった。戦う相手は毛沢東率いる共産党の八路軍。食料や弾薬を支給されて警備をした。北支では日本と共産軍と蒋介石の軍隊と三つ巴の戦争をやっていたことになる。

我々は「天皇陛下のため、国のためなら火の中でもどこでも飛び込む」という教育を受けていたのと同じに、共産党軍は「死んだらまた生き返る」という教育だった。死ぬのを名誉に思い、死ぬのを恐れずどこまでも戦う。そのため共産党がだんだんはびこってきて、共産党の勢いが強くなり、最後は蒋介石を台湾に追い出してしまった。

毛沢東軍は、我々が警備している駅を襲撃する。我々が持っている武器などを奪いたいのだ。それと応戦して、すごい戦いになったことがあり、その時に今市の友達は亡くなった。

ほかの地域では、戦争が終わればアメリカの捕虜になったりしたが、夜、歩哨したり、死んだ人を焼いたり、我々はまだ戦っていた。そういうことがあったなんて、国民にはあまり知られていな

いと思う。

●野坂参三の帰順勧告

日本の政治家であった野坂参三は「戦争は絶対反対」と主張していたから、憲兵から睨まれて日本から追い立てられ、中国に飛んだ。延安が共産党の本拠地らしかった。

我々は終戦になったとき掖県にいたが、戦争をやめて高密に出てきた。野坂参三は、慰安隊といつて慰問をして回っていた。「日本の皆様、なぜ戦争をしているのか?」、「家族は陰膳を供えて一日も早い皆様の帰りを待ってるんですよ、何のための戦争をしているんですか」と戦争をしないように訴えたり、「茨城が艦砲射撃でやられた」と、我々の近くまで来てそういう情報を放送で伝えたりした。「皆さん、食べ物不足してるでしょ」と言つて、団子などをいろいろ提供したりもした。用心して食べなかったが。

野坂参三は延安において、奥地にいる我々と人民解放軍（共産党軍）との間に入ってくれた。戦争が終わったんだから、日本軍は無事に日本へ返せと言った。

●鉄道の警備

鉄道警備は済南から青島が受け持ちだったが、敵は鉄橋や線路を爆破に来る。奥の方から日本の在留邦人だのが、みんな青島に向かって引き上げ

てくるので、そういう人たちを我々は守ったりした。リュックを背負って、女は身を守るために女に見えないような男のような格好をして。鉄道が爆破されれば何日もかけて歩いてくる。その警備を我々は請け負ってやっていた。

しかし駅に日本兵がいるので、八路軍が攻めてくる。だから夜でも、いざ「起床!」と言われたらいつでも飛び起きられるよう、準備して寝床に入っていた。

八路軍の1500人の来襲を受けたこともあるが、大変な敵の数だ。敵は昼間は来ないで夜に来る。装備は擲弾筒と手榴弾で、小銃も多少持っていたが、日本軍ほど整備されていないので機関銃などは持っていない。

敵が来ると照明弾を上げるので、敵の動きがわかる。そこへ銃器でダダダダーと撃ち込む。そうやって追っ払ったが、そういう野戦はまるで花火大会のようだった。圧倒的に日本が強かったが、日本人の何人かは戦死した。

食物にはあまり困らなかったが、山の中の奥地で陣地構築しているときは、食料が届かなくなることがあった。そこで夜明けに、遙か彼方、望遠鏡で見たら煙が出ていた。敵地区の、途中に地雷があったりして危ないところを通して、そして食料を盗るわけだ。敵もパンパン撃ってくるけど、

ある程度の部隊がいると部落民も逃げてしまうので、部隊のための食べ物を略奪したこともあった。

●やっど帰国

青島まで出てきて武装解除された。内地に帰って来たのは翌年、昭和二十一年の1月23日、米軍のLS艇で青島を出帆した。船の中から長崎県の五島列島を見たときに、「国破れて山河あり」と、涙が出た。戦友どうし手を握り合い、呆然と涙を流したことは未だに忘れられない。

しかし佐世保に上陸して、戦友3人の遺骨を抱えているが、戦後半年も過ぎていたので、見慣れた光景だったのか、誰も無関心だった。たまたま年寄りのおばちゃんの手を合わせて押んできた時には、戦友どうし嬉しくて涙が出た。

京都では、アメリカの進駐軍に若い日本人の女の子が抱きついてるのを見て、誰もが「なんだ、日本は！」と落胆した。

当時、朝鮮は日本の占領下だったから朝鮮の連中も兵役で取られて日本軍の中にいた。朝鮮兵も佐世保まで来て、また佐世保から朝鮮へ帰った。

●若い人に伝えたい

1年生の時に満州事変、6年生の時に盧溝橋事変、中学で大東亜戦争。戦争ばかりの青春時代だった。中学では軍事教練が科目に入り、軍から小

銃、背囊（リュック）、水筒が支給され、配属学校が来て、軍隊同様の訓練を受けた。グズグズしているとサーベルで殴られる。

天皇陛下のために死ぬことを教育され、学校の先生も戦争の勇ましい話ばかり。それを聞いて育てば、「よし、俺も天皇陛下のため、国のために働いてくるぞ」という気持ちになるのは当然である。その頃は純粹にそういう気持ちでいっぱいだった。教育の力は恐ろしいと思う。

私が中国で戦っている間も、日本のどこかの都市が空襲され家が焼かれ、空から射撃され、人々は逃げ惑い、地獄のような凄まじさだった。皆さん、戦争は、武器を使った人間と人間の殺し合いなのです。敵を殺すか、自分が殺されるかの戦いなのです。

戦争は、勝っても負けても惨めです。ひどい目に遭うのは国民です。あの時代を振り返ると、今の平和な日本、70年も戦争をしていない平和な国、大したものですよ。自由で、思ったことはなんでも話せる、こんな良い国はないと思います。

この平和に感謝したいと思います。この平和を守っていけるよう、若い人たちに私の経験を伝えたいと思います。

最後に、一緒に戦った今は亡き戦友たちの名前を記し、冥福を祈りたいと思います。

黒川恵一（下沢町）
根本義一（御成橋町）
高橋作次（久我）
高瀬一司（旧姓：日向野 大和田町）

第十二独立警備隊―独立警備歩兵第六十二大隊 （至巖第一五七三部隊） 略歴

昭和20年

5・10 中華民国山東省高蜜県高蜜にて軍令により第十二独立警備隊編成下令

5・15 編成完結
独立警備歩兵第十八大隊より山東省高蜜県、平度県、掖県地区の警備を継承す。

5・ 海陽県小紀付近における対岸陣地構築のため、大隊主力（第三中隊を除く）はまず平度に集結す。

（註）実質警備は4月20日頃より実施あり。

5・20 小紀に向け前進の途中、萊陽県後右廟において一時駐留旅団主力の追及を待っておったところ、膠東軍区第十六団主力及び海陽県区中隊約一五〇〇名の来襲を受けたが、多大な損害を与え撃退す。

5・24 兵団命令により兵団駐留位置である萊陽県穴坊莊反転す。

5・27 兵団主力とともに萊陽県穴坊莊を出発す。海陽県管裡村に到着。該地区にて対岸陣地の構築に専念す。

7・3 兵団命令により海陽県小紀東側索格莊に向け移

